

見物左衛門とその子孫たち

—— 狂言から黄表紙・歌舞伎へ ——

浜田泰彦

はじめに

二、狂言「見物左衛門」とそのヴァリエーション

三、黄表紙作品に継承される見物左衛門

四、歌舞伎『洛陽見物左衛門』——原型離れ——

おわりに

近世の旅文芸では、富山道治『竹斎』に由来する二人行脚の系譜が主流である。一方で、狂言作品「見物左衛門」の主人公見物左衛門に由来する一人行脚も江戸時代を通して、命脈が保たれていた。「見物左衛門」系統の諸作品は田舎住まいの僧侶が京に憧れ、京を見物するのだが、慣れない土地を訪れたために様々な失態を繰り返すストーリーが付随する。

見物左衛門は黄表紙作品に進出した。松壺舎作『東都見物左衛門』（安永八・一七七九年刊）では息子の見物太郎が江戸の遊里をくまなく周遊する趣向がとられており、陀々羅大尽作・歌川豊国画カ『へ夫京都／＼是東都』見物左衛門』（寛政二二・一八〇〇年刊）では、見物左衛門一行が、慣れない江戸で様々な失態を繰り返す。また、並木五瓶作の歌舞伎『洛陽見物左衛門』（天明四・一七八四年上演）で、国家転覆をたくらむ荒木左衛門が潜伏時の替え名として見物左衛門を名乗るのはかなり異例である。

はじめに

僧侶の諸国抖敷行脚を描いた説話作品は、『撰集抄』の西行が典型となろう。今日該書が西行仮託作であることは疑いを挟む余地はないものの、一方で江戸時代に版本を手にとった読者は西行の旅を刻んだ書物であると理解していた。たとえば、洛下旅館の序文のある『宗祇諸国物語』（貞享二・一六八五年正月刊）には、常陸国のはずれの断崖絶壁にひっそりたたずむ無名の僧の粗末な庵に行きあつた宗祇が、「かく立はなれたる方にも住はすむ人の有かな。誠や西行法師の諸国修行して。まゝかゝる事を見しより。たゞにやみなんは。ほひなしと集て撰集抄となしけんも宣なるかな」（傍線、浜田。以下同様）⁽¹⁾と思念する場面がある（『隱逸扉』巻二ノ四）。無名の高僧との出会いを果たす西行に自らを重ねる右引用部など、紛れもなく『撰集抄』が西行の行脚の記録と享受されていた証左となろう。

ところで、『撰集抄』版本の挿絵には西行ともう一人の僧が同行する姿が描かれる。この僧には名も与えられず、本文中での活動描写もない。恐らく、西行の身の周りの世話のために同行した従者であろう。そして、この主従二名の修行行脚こそが後の「行脚もの」の文芸作品の方向性を定めた。

富山道治『竹斎』（元和七・一六二一〜同九・一六二三年頃刊）の主人公で數医者竹斎の旅には、にらみの助という同行者がいる。にらみの助は、山城を離れる意志を示した竹斎に対し、「いづくまでも御供つかまつらん」と申し出る「郎等」⁽²⁾であった。和歌を詠みつつ高僧との対面を果たす西行の旅に対し、狂歌を詠みつつ江戸下りを志す竹斎の旅は、『撰集抄』の「もじり」としての位置を確立し、模倣作あるいは追隨作を生み出したことはよく知られたところである。⁽³⁾

竹斎と一休の二人行脚を描いた野元道元カ『杉楊枝』（延宝八・一六八〇年正月刊）、筍斎と友の男の二人行脚である西村未達カ『新竹斎』（貞享四・一六八七年春刊）、その筍斎が一休と二人行脚に赴いた『二休咄』（貞享五・一六八八年刊）等言うに及ばず、主人公公業阿弥と偶然出会った大坂の手代が江戸から京に上る浅井了意『東海道名所記』（万治三・一六六〇〜同四・一六六一年頃刊）も『竹斎』追隨作品の一つに加えることができよう。

他方、一人行脚の作品も陸続として刊行されている。たとえば、『巡礼物語』（寛永・一六二四〜四三年間頃刊）は、名所記の趣きもある主人公玄斎の一人旅が描かれており、浅井了意『出来斎京土産』（延宝五・一六七七年正月刊）や前掲『宗祇諸国物語』も前者は名所記風、後者は諸国行

脚の一人旅を描く。浮世草子では井原西鶴『懐硯』（貞享四・一六八七年三月刊）の伴山の一人旅もここに銘記しておかねばなるまい。

右の通り、一人行脚（旅）に設定した諸作品には『竹斎』のような追隨・模倣作を生み出す人物も作品にも恵まれなかったに見える。しかしながら、狂言作品に初登場を見た「見物左衛門」とその系列作品があることにはあまり従来あまり注意が払われていない。そこで、本稿では「見物左衛門」とその派生作品への展開を描出しようと試みるものである。

二、狂言「見物左衛門」とそのヴァリエーション

田舎住まいの僧・見物左衛門が京の都を見物し、その道中が道行文同然に語られるのが狂言「見物左衛門」の大枠のストーリーである。その筋立ては「深草祭」と「花見」に大別される。「雑狂言」ないし「集狂言」に分類されるのが通例であるが、登場人物はシテの見物左衛門一人であるため、「独狂言」に分類されることもある演目である。

たとえば、元禄一三（一七〇〇）年以来版を重ねた『続狂言記』所収の本文は「深草祭」見物を志す「見物左衛門」の本文が収められている。冒頭、以下のように登場する。

罷出たる者は。此当りに住居致す。見物左衛門と申者でござる。今日は加茂のけいば。深草祭でござる。毎年見物に参る。今日も参らふと存する。又某一人でもござらぬ。爰にぐつろ左衛門殿と申て。毎年同道致す人が有。今日もさそふて参らふと存する道行うちらゐられたらよふござらふが。とれへも出ぬ人じや。定而うちらゐらるゝであらふ。やあ是じや。物もふ。ぐつろ左殿。うちにござるか。何とはや見物にござつた。やれぐ。ぐつろ左殿と。同道せねば。みどものなぐさみがない。

「罷出たる者は」の冒頭箇所から察せられるように、「見物左衛門」は「諸国一見の僧」の系譜に連なる演目である。見物左衛門は、ぐつろ左衛門と同道で深草祭に志すが、あいにく先に見物に出かけており、不案内な様子を見せている。つまり、見物左衛門は望んで一人旅に出かけたのではなく、やむなく一人で出かけざるを得なくなったわけだ。頼りとするぐつろ左衛門と同伴できなかった見物左衛門は、競馬会神事に無事到着したものの、落馬を目撃しつつ笑いだしてしまふ。周囲の不興を買った見物左衛門は、「何じや。そなたは。みどもがわらひがくになるか。何とおしやる。ぶたれふとおいやるか。そなたにきずはつけまい。身どもは町でかくれもない。大いたづら者じや」とあ

ろうことか威勢を周囲に示し、対峙してしまふのであつた。失態はこれにとどまらない。子ども相撲の人だかりに巻き込まれた彼は、草履の跡を踏まれ背中に据えた灸の跡を擦りむかれながらも土俵に上がり、自分は四十八手どころか八十八手も百手も心得ていると、先の場面と同じく威勢を示し、ついに取り組みに挑む。

あいたく。これはかんにんがならぬ。やいそこな。

かきのかたびら。かきのはちまき。をのれ見しつたぞ。

やれ子共もかゝつてくれ。ゑい。とうくく。なむ

すまふ御たいさん。また明年参らふ

ところが——案の定というべきだろう——、打ち負かされた見物左衛門は「かきのかたびら。かきのはちまき」に加勢を頼む始末。「南無三宝」ならぬ「南無すまふ」と捨て台詞を吐き、次年の参詣を誓うのであつた。

このような田舎の僧侶が慣れない都市を見物し、失態を重ねる物語の大枠は維持されつつも、見物左衛門の関心は花鳥風月や神事から通俗的なものに移つてゆく。

安政三（一八五七）年孟春の刊記を有する「都大夫一中直傳」の『都羽二重拍子扇』に収められた「見物左衛門」において、彼が興味を示すのは、京の遊女であり芝居である。冒頭は以下の通り。

五色の外にいろといふく物は手染の情なり。ケ様に

候者は洛中第一の果報者。東西南北のわけ里を毎日見物左衛門とは我等でゑす。親なし。子なし。商賣なし。世話なし。苦なし。たわいなし。世界はひろし。わが庵はみやこの辰巳耳塚の京へは遠きつんぼ谷。きかぬがほとけ大佛殿。⁸

五代目都大夫が「直傳」を受けたという一中節の「見物左衛門」は、先の狂言よりも出自が明らかにされている。まず、身寄りがなく生業もない気楽な立場であること、さらに、京から遠く離れた「つんぼ谷」に庵を構えていること等、より詳細な情報が付加されている。そして、次のような語りが展開される。

(…)まことに佛をおがんでからおもえぬ欲がおこりました。ヤアあれへ見ゆるは恋のわけしり好色女。いたづらさうなしこなし。幸所の名物をもたづねどぶぞ道連になりたふ存る。なにくそさまはところの人か。ちとたづね申たきことの候。⁹

ワキがこれに応じると、見物左衛門は再度語り始める。

イヤくるしからず。我レ事は都見物左衛門と申者。承れば此所に女大夫和歌の舞芝居興行めさるゝよし。ちとのそいても大事なくは名さへ見物左衛門じや。棧鋪下でも舞臺でも、仕然の穴からでもそこが好物のぞきたい。どふぞちらとなるまいか。¹⁰

「狂言「見物左衛門」とは異なり、一中節の彼はワキである。「好色女」に清水寺や色里の案内を受ける。「唐も日本も世さかりも恋の市日とにきわゑり。わしがおぼへし品々をあらましかたり申べし」と語り始めると、以降、見物左衛門は時折相の手を入れるのみで発話はない。一中節「見物左衛門」は、後半は「好色女」の案内で占められており、最後は「國民繁昌千種樂萬々歳とぞ祝ける」と祝言の定型句で幕を閉じる。狂言で失態を繰り返す見物左衛門の姿はそこにはない。とはいえ、

年若やかなる御萬歳と御代もさかへします。《中略》
女郎はぼんじやりと中ごろははりつよくいまの女郎と申るはよろつよしの花もみち松梅かこひつぽねまで
いろ品すがたのはてくらべ。かはらぬ中の友白髪¹¹⁾。

などと遊女評判記さながらの文句から祝言を始めている点は、これまでの「見物左衛門」と性格が大きく異なっている。それと同時に、見物対象の通俗化は、失態を繰り返す見物左衛門の人格に元々宿っていたことも付言すべきだろう。はたして、見物左衛門の子孫たちからは江戸の遊里を見尽す者が出現している。次節の黄表紙作品がそれにあたる。

三、黄表紙作品に継承される見物左衛門

『東都見物左衛門』(安永八・一七七九年刊)は、上下二巻二冊全十丁で構成される黄表紙作品である。作者は、松壹舎。江戸馬喰町に草双紙問屋永寿堂を構えた西村与八の号とされる¹²⁾。十ウに富士山が描きこまれた屏風絵中に画師北川豊章の名が見える。

便宜的に、棚橋正博氏『黄表紙總覽 前篇』より梗概を引く。「都見物左衛門の一子見物太郎が江戸吉原、深川・品川の遊里を尋ね、地獄・極楽の私娼街を巡るところで昼寝から醒めるとする」。見物太郎は、菊岡沾涼『江戸砂子』を読みながら昼寝に落ちたというのが本書のオチである。見物太郎が江戸の地誌から得たかったのは、名所旧跡の類の情報ではなく遊里であったために中途で眠りに落ちたとしても解せようか。いずれにせよ、四年前に刊行され「黄表紙」の初発となった恋川春町作画『金々先生栄華夢』(安永四・一七七五年刊)が採った夢の趣向の枠組みを継承した作品である¹³⁾。

本作品の主人公は見物左衛門の一子見物太郎で、見物の対象は京から江戸に移っている。これは黄表紙の舞台が江戸に置かれている以上、自然な成り行きである。加えて、神事や花鳥風月ではなくもっぱら遊里に関心が移っている



【図版①】『東都見物左衛門』 壱オ

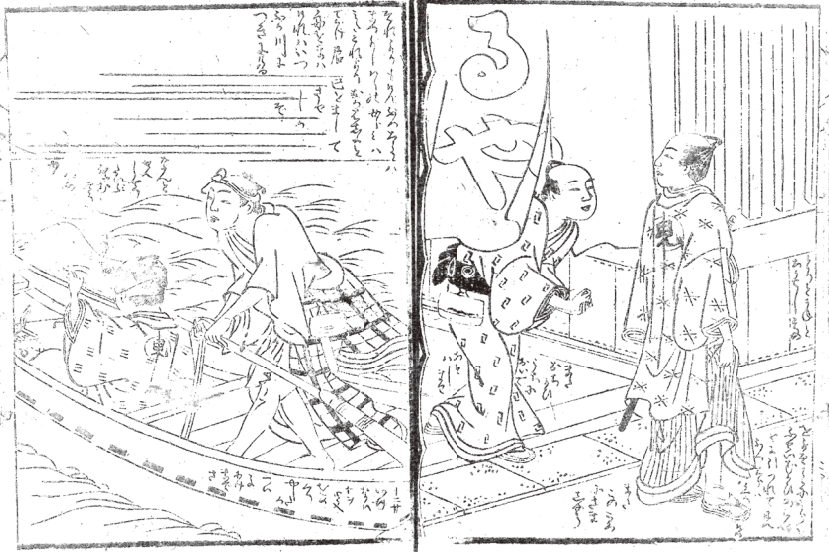
のは前節で紹介した一中節と趣向を同じくする。本作品は、これまで翻刻紹介がなされていないため、以下適宜図版を交えて翻刻を一部示すこととする。冒頭、見物太郎は以下のように紹介される（【図版①】）。

かやうに候者は、みやこ見物左衛門が一子見物太郎と申者にて候。いまた東都^{みやこ}見物いたさず、狐にこんとなきついでなれば、「みやこ一けんせばや」とそんし候などとは、おらがおよしかまいどきたときのしやれさ。今はこれではいかん。ほそつくりの長わざさしつかまへ、きんぐと出しかけ、ちり仕立にしまのおびにて、

つけの丸角ちよつきりちよんとふらつかせ、かたつほちよひとつまみそりかへつて、きんぐあゆみにあゆみかけ、まつみやこにても名高きよしわらへいさんと土手へゆけは、ともたちにあひて、これよりつれたちぬ。

見物太郎が「なんと先生おかわりもなしか」と挨拶する「ともたち」は、これ以降の遊里見物には同伴していない。狂言作品と同様の一人旅のスタートが上の図版である。通人らしく本多鬻を結った見物太郎は、この後吉原の茶屋を見物し、名取の太夫「すか浦」に案内を受け、新造たちと会話を楽しみ（壱ウ〜二オ）、初会の客として座敷に上がる（二ウ〜三オ）。「モウおやすみあそばせえ。ちややもたいこもかへりけり」と長居をけむらがられた見物太郎は、あつさり^{あつさり}と吉原を去り（三ウ）、猪牙船に乗り岡場所を目指す（四オ、【図版②】）。当該場面には以下のような語りが入る。

それよりもけんふつ太らうは、まつよしはらの女らうはみた。これよりおかはしよとてかけ、辰巳をさして舟をまはさせければ、いつしかふか川にぞつきにける。この吉原から深川への移動は、お定まりの遊里見物の経路である。以下、岡場所見物は、深川（四ウ〜五ウ）↓高輪（六オ〜七オ）↓鳥の町（七ウ〜八オ）と経路をたどる。



【図版②】『東都見物左衛門』3ウ・4オ

「東都みやこもたいかい一けんしました」と見物太郎は区切りをつけようとするが、一年や二年では見尽すことはできないと友人にさらに地獄・極楽と呼ばれる低級な私娼を見物するよう促される(八ウ)。助言に従い、地獄(九オ)〔図版③〕極楽(九ウ・十オ)を相次いで見物し、ここまですべてが全て夢であったと判明し、目覚める最終場面を迎える(十ウ)。その地獄では、

(…) おくにきれいなざしきがあつて、その二かいへつれてあがつたところ、うつくしい女があがつて、「よふおいでなざつた」とゆふかと思へば、ゆめのやふであつた。まことにぢごくとはよくいふた。

といった所感を述べる。右の一節もまた夢の中の出来事なわけで、「ゆめのやふ」と回顧するのは滑稽でしかない。かように多少の滑稽味はあるものの、本作品は遊里の周遊に重点が置いてあり、各所の描写は淡白である。主人公金村屋金兵衛がもてはやされたいがために吉原に繰り出し、もとより半可通であるためふられ続けて最後は品川に流れしてしまう『金々先生栄華夢』の劇的でテンポの早い展開とは比較にならないほど起伏に欠けると言わざるを得ない。前掲『黄表紙總覽』で棚橋氏が「内容画風ともに稚拙さが目立つ」と評したのも至当であると思われるが、一方で、本作が「見物左衛門」の後継作として企画された点は看過



【図版③】『東都見物左衛門』8ウ・9オ

されてはならず、そのために評価を貶めるのは不本意ではあるまいか。たとえば、深川の座敷が「このちのあそひなれやすく、かみはくしまきうしろおびきつい」といった衣装髪型や、唐話が流行している（「ほかへつうせぬからこ」とば）（四ウ）といった当代風俗が観察の対象になっている点は「見物左衛門」の性格を継承しているし、また、鳥の町では連れ合いにはぐれた寂しさから茶汲女に抱きついて鬘盛を買っており（七ウ〜八オ）、失態続きであった父親の遺伝子もしつかり受け継いでいる点にも注意が払われるべきだろう。

陀々羅大尽作・歌川豊国画カ『へ夫京都／是東都』見物左衛門（寛政二一・一八〇〇年刊。以下、『見物左衛門』と略す）は、見物左衛門を主役に据えた黄表紙作品である。「東都見物左衛門」からの影響は特に見られない。夢の中で江戸を周遊する趣向は前作と同様であるが、前述したように本話での体験が夢であるとする展開は黄表紙の定番であり、とりたてて『東都見物左衛門』から継承したとはいえない。

本作の内容は、「片田舎に住む見物左衛門は大黒天から夢で江戸見物をさせて貰い、江戸の諸所の賑わいを見る」（前掲『黄表紙總覽』）¹⁷ というものである。例によって、

当作品も見物左衛門の紹介から幕を開ける（【図版④】）が、以下に引く一節にあるように、これまでの「見物左衛門」とは随分趣きが異なる。

頃は福徳三年とかや。ずつと片田舎に、見物左衛門といへる百姓あり。親だいく大金もちにて、なに不足なき暮しなりしが、年久しく江戸見物を心掛けけれども、われ一人見物に出で楽しむことを嫌い、家内下々の者までも連行き、見物させたく思ひけるに、とんと農業の暇なく、又くる春も、来年は往かんと延ばしおきけるが、今年は是非、江戸見物に出んと、親類、別家の人々へも、相談しける。然かるところ、先づ正月のことなれば、家内うちより、江戸名所双六を取出し遊びける。折ふし不思議にも、皆々、睡気さしけれバ、この家を守らせ給ふ大黒天現れ玉ひ、仰せけるは、「賢者ハ未だ必ず富ず、富者ハ未だ必ず賢ならず、と古語にありて、不仁にして富める者を戒めたれど、その方ハ、よく家内下々の者までに慈悲深く、世間に貧しき者あれバ施し、真実なるその方ゆへ、かねて願ふところの江戸見物を、家内残らず、居ながらさせてやらんと思ふ。その上、よき案内者につけて遣す故同道して、見物すべし」と、告げ給ふぞ有難き。

これまでの見物左衛門が専ら孤立無援な存在だったのに



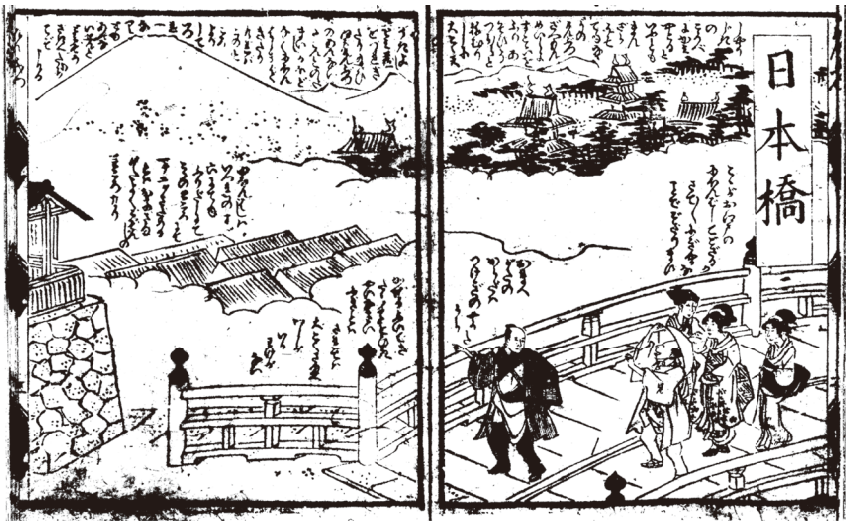
【図版④】『〈夫京都／是東都〉見物左衛門』1ウ・2オ
（東京都立中央図書館加賀文庫蔵本。請求番号81-22。以下、同様）

対し、『見物左衛門』では富裕な家に生まれ、親類以下
 下々の者まで慈悲をかける感心な人物になっている。田舎
 住まいが大都市江戸に憧れ見物をしたがる設定は継承され
 てはいるが、過怠なく生業に勤めるためにそれをひかえる
 との設定は異例である。とまれ、右引用部にある通り、勤
 勉で「貧しき者あれば施」す高い徳を認め、夢の中ではあ
 るが大黒天は「うきよし富蔵」を同伴させ、まずは日本橋
 へ案内する（二ウ〜三オ、【図版⑤】）。

いかに人格者といえど、見物左衛門の血は争えず一行は
 失態を繰り返す。増上寺の大鐘を見た彼は、「日高川の浄
 瑠璃で聞いた」と音が似通う道成寺と勘違いし富蔵に正さ
 れ（三ウ〜四オ）、堺丁で入った芝居小屋では春狂言の曾
 我ものを演じる役者に、紛失した友切丸のありかを客席か
 ら教えようとする（四ウ〜五オ）。さらに、有名な料理屋
 巴屋に通された見物左衛門は、次のような失態を見せてい
 る（【図版⑥】）。

此の所の名物なればとて、大蜷の吸物を出しけるに、
 見物左衛門ハ田舎にて、蜷といふもの喰つたこと無け
 れバ、富蔵が小便に行きし後にて、かの蜷汁を貝共に
 喰ひ、大きに齒を痛めける。

彼はこの後も似たような失態を繰り返している。深川八
 幡の二軒茶屋で出された大栄螺の壺焼きの貝殻を噛み砕こ



【図版⑤】『〈夫京都／是東都〉見物左衛門』1ウ-2オ



【図版⑥】『く夫京都／是東都』見物左衛門』5ウ-6オ

うとして、富蔵にたしなめられる（八ウ〜九オ）。同種の失態を登場させたのは、本作品の構成上の稚拙さともなっている。

他方、本作の見物左衛門は堅い性格が際立っている。富蔵は「見物左衛門があまり堅い男なれば、何とぞ少しづつ柔らかにせんと」（六オ）、吉原にも連れ出す。ところが、『東都見物左衛門』の見物太郎のように見物の対象としてすら関心を示さず、「銭金程大事なものハなし」と富蔵に代金の大半を支払わせる始末で、「その後、一向往く気も」示さない（七ウ〜八オ）。『見物左衛門』の結末も、「十ぶんな奢ハせまいと」大黒天が示し、それに応じて「見物左衛門も有難く思ひ、益々家業に精出し、行末永く繁昌しける」と幕を閉じる。このように本作では狂言以来の見物左衛門の浮ついた性格は、消え去ってしまっている。この背景には寛政の改革とそれに伴う寛政三（一七九一）年の山東京伝の筆禍事件等による戯作者の自主規制が影を落としているであろう¹⁹。ただ、本稿が担うべき問題を超えてしまいうため、作風が変化した理由は推定にとどめておきたい。

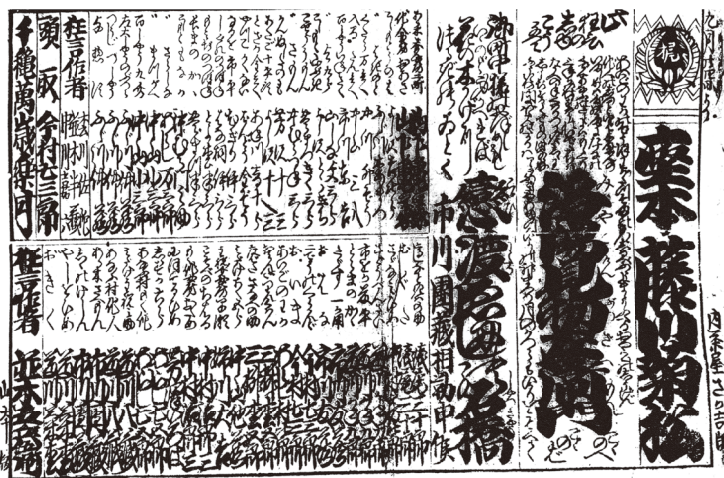
四、歌舞伎『洛陽見物左衛門』—原型離れ—

天明四（一七八四）年九月二十四日より翌月二十六日まで、およそ一月の間大坂藤川座（座本藤川菊松）にて『洛

陽見物左衛門』が上演された（『歌舞伎年表』）。狂言作者は並木五瓶。五瓶は安永五（一七七六）年十一月より江戸へ下る寛政六（一七九四）年十月までの十八年間、主に大坂の角の芝居にかかわり続けたが、本作品はその多作だった時期に発表された演目である。しかしながら、上演がこの一度きりだったためか五瓶の研究でも言及が見られない。幸いにして、番附表（図版⑦）と絵尽し（図版⑧、⑨）が残されており、舞台の様子がおおよそ把握できるほか、京都大学附属図書館大惣本蔵書中に台本の写本全六巻が残されていて、おおよその内容は現在でも確認できる。

その台本の共表紙——各冊白茶地浅黄色格子文様の保護表紙が付けられている——に、墨で「愛護／増補」洛陽見物左衛門」と大書きされているように、本作品は「愛護の若」の物語が下敷きに置かれている。すなわち、二条家と高階家との間で紛失した家宝（師子王の剣・刃の太刀・歌書「八重垣」をめぐる対立を軸とし、二条蔵人が紛失した歌書「八重垣」紛失の嫌疑をかけられ、二条家を追放された愛護の若を恋慕う漣姫と鳩照姫との三角関係が脇筋として展開するストーリーである。

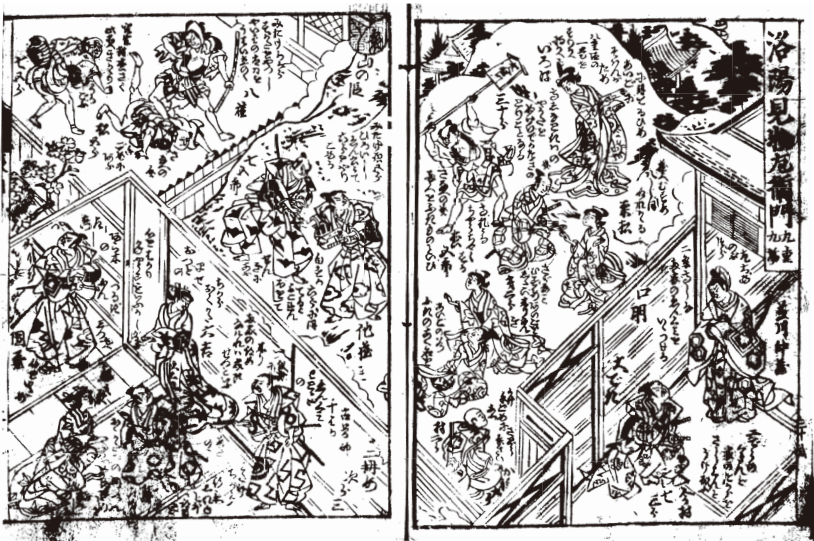
本稿に関係するのは、伊賀流の忍術を用いて家宝を盗み出した二条家の家臣荒木左衛門が、見物左衛門の替え名で北山に城を構え潜伏した一連の流れのみである。本来であ



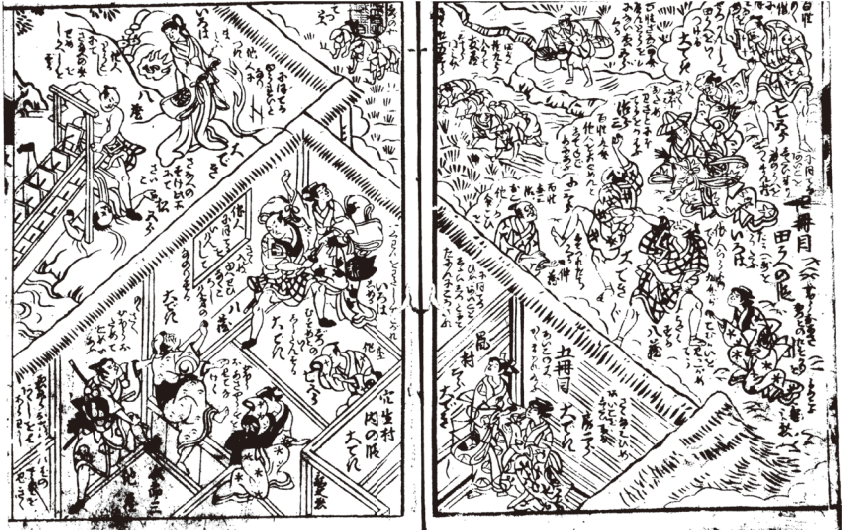
【図版⑦】『洛陽見物左衛門』番附
 (大阪府立中之島図書館蔵「天明より寛政大坂各座番附」請求番号974-68)



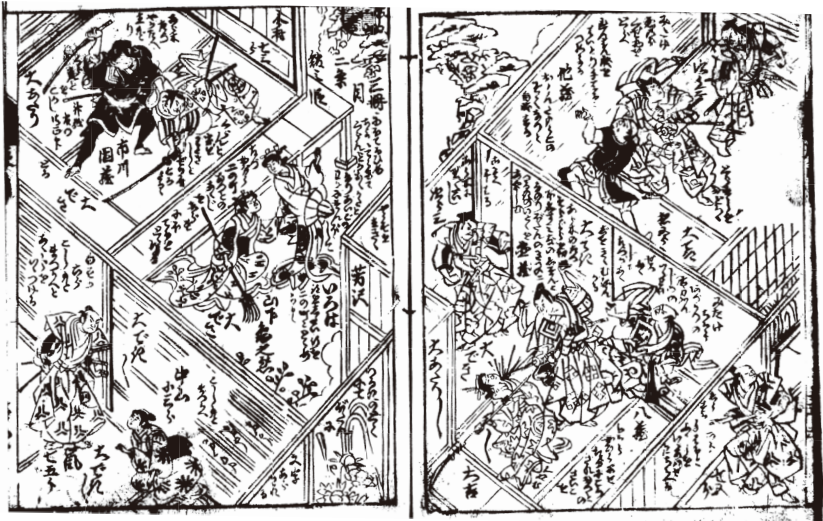
【図版⑧】『洛陽見物左衛門』絵尽（1）
 （大阪府立中之島図書館蔵『歸命曲輪文章』
 請求番号974-62。以下、同様）



【図版⑨】『洛陽見物左衛門』絵尽（2）



【図版⑩】『洛陽見物左衛門』絵尽 (3)



【図版⑪】『洛陽見物左衛門』絵尽 (4)



【図版⑫】『洛陽見物左衛門』
絵尽 (5)

れば、未紹介資料である本作品の詳細な内容紹介や検討を行わなければならないところだが、本稿の主目からはずれぬため、それはひかえることを諒とされたい。

荒木左衛門は、高階家の家宝師子王の剣と二条家の家宝刃の太刀の両方とも伊賀流の忍術で盗み出す。そもそも両者は、二つの家の縁を取り持つために交換する勅証が発せられていたのであった。二条蔵人は、「二条高階は大内補佐の臣下として、神祇官の司」であるので、両者を取り換えて「ちなみを結んで禁庭を守護するならば、国家静謐のもとひならんと、大内記をもつての勅証」があった（第一冊）とその事情を説明している。両者を入手した荒木左衛

門はしたがって、二条高階両家を翻弄できる立場になったのである。蔵人も荒木のたくらみを見破り、荒木の妻二の町を拘束するも、かえって荒木に返り討ちにあつてしまつた（第三冊）。荒木左衛門は、出自からこうした野望を抱いた経緯を説明している。

傳へ聞。祖父純友が討死は、筑前はかたの津。都の討手は小野の好古。首取しは橘遠保別當高階の先祖。父は空敷。祖父の鬱憤四海をくつがへし天子となつて、先祖の本懐を達せべしと都へ登り、より／＼に一チ味をかたらひ、時節をはかる。其為に二条家へ入込、名字は荒木左衛門と名乗も、父の仇橘氏の家を□□^{（五世祖）}は日頃の望み。天子の重宝手に入上は、山林に取籠り、父は九筋に住でつくし左衛門と呼、我は上方地利のあんないさいに達せしゆへ、都見物左衛門と名乗、おつけ大望成就、祖父純友が無念をさんぜん。（第二冊）

荒木の祖父は、天慶二（三年）（九三九）（九四〇）の乱で海賊を率いて朝廷方に敗れた藤原純友で、それが盗賊の血筋の由来とする。そして、「四海をくつがへし天子とな」ることが祖父以来の「本懐」であり、その「大望成就」を果たすため、師子王の剣と太刀の刃を入手したのであると述べる。二条家に潜入したのも秘密裡であつて、妻二の町にすら純友の孫であることを明かしてこなかった。この台

詞の直前、父は筑紫左衛門武純で自らの幼名は少槻丸だと明かしているが、その父の呼び名に倣って都見物左衛門を名乗ったという。

国家転覆を謀る見物左衛門は、これまでの系譜から見れば、異例である。自ら都見物に出かけることも、都に出て失態を続けることもない。むしろ、とぼけた「見物左衛門」とは対極にある作品とみなすべきだろう。たとえば、古曾部千晴に「嵐山の夕暮となせの瀧の落かゝるは、水の手をたやさぬ要害」、「時雨の亭は物見のやぐら」（第五冊）などと嵐山が天然の要害であると思案を披露する一連の語りからは、慣れない都の風俗に右往左往する「見物左衛門」の要素は皆無であると言つてよからう。ただ、「洛中をはいくわいし一味をかたらふゑせもの」（第五冊）という敵方の評に僅かに「見物左衛門」の痕跡をとどめるのみである。本作品での荒木左衛門こと見物左衛門は、原型に相当のデフォルメが加えられているのは明らかである。と、同時に狂言に由来する見物左衛門の充分な定着が一八世紀後半に確認される一つの事象とも把握できる。

おわりに

以上、狂言「見物左衛門」以降の系譜を素描してきた。田舎住まいの僧侶が慣れない都——京都から江戸へ移行す

る——を一人で見物するという枠組みを継承しつつも、黄表紙への進出とともにその姿が次第に変容されていくのが理解されたかと思う。冒頭にも記したが、『竹斎』を典型とする二人行脚の系譜は、これまでの研究でも明らかにされてきた。さらに、二人行脚の結実は十返舎一九『東海道中膝栗毛』（全八篇、享和二〜文化五・一八〇二〜〇九年。「発端」は文化一一・一八一四年追加）にあると見てよいだろう。弥次郎兵衛喜多（北）八の旅は、「狂言のシテ・アドや仮名草子『東海道名所記』（浅井了意）、『竹斎』（富田道治）の主人公を原型にして」いると²⁵か、『東海道名所記』での滑稽な二人組が、東海道を江戸から京へ上る趣向は、近世後期の『東海道中膝栗毛』に影響を与えた²⁶などといった諸先達の指摘の通りである。

『東海道中膝栗毛』の一つの見どころは、弥次喜多が各所で繰り返す失態にある。有名なところでは、小田原の宿の五右衛門風呂の入浴の仕方が二人とも分ならず、遂には踏み破ってしまった（初篇）とか、京四条河原の芝居小屋で「大根」を役者の仇名と勘違いして舞台に向かって声掛けしてしまい顰蹙を買う（七篇上）といった他愛のないエピソードがあげられる。このような『東海道中膝栗毛』の旅先での失態は、初めて入る土地の習慣や文化を弥次喜多が無知であることに起因する。

この図式は「見物左衛門」の主人公たちの行動に合致する。たとえば、陀々羅大尽作の黄表紙『見物左衛門』において、堺町の芝居小屋で役者に紛失した刀のありかを教えようとしたり、貝殻を知らずに齧って歯を痛めてしまうといった失態も、見物左衛門一行が田舎住まいゆえに、江戸の習慣や文化を知らなかったことに起因した滑稽であった。この作品が一九の念頭に置かれていたか否かは分からないし、ましてや、『見物左衛門』が典拠であるなどと指摘するつもりはない。ただ、『東海道中膝栗毛』が近世の累々たる旅文芸作品の積み重ねがあつて成立しているとすれば、『竹斎』の系統だけではなく、「見物左衛門」の系譜も継承されていると指摘しても問題ないのではなからうか。

たしかに、「見物左衛門」の一人旅は、『竹斎』と比較してはるかに傍流にあると言わなければならない。しかし、細々とはあるが、確実に狂言作品以来命脈を保ってきた「見物左衛門」の系譜の意義が本稿によって明らかになれば幸いである。

注

- (1) 引用は、『西村本小説全集』上巻(一九八五年・勉誠社)に拠った。
- (2) 引用は、野間光辰編『日本古典鑑賞講座』第十六卷(一九六三年・角川書店)に拠った。

- (3) 野間光辰「竹斎」、(2)同書所収。
- (4) 服部幸雄「独狂言考」(『歌舞伎成立の研究』一九六八年・風間書房)によると、「見物左衛門」を「独狂言」とするのは、野々村戒三・安藤常次郎校注『狂言三百番集』下(一九四二年・富山房)以前には遇れないと言う。また、「松平大和守日記」等の江戸時代の文献に拠る限り、「独狂言」とは一人の役者がシテ・ワキ等の複数の役を演じる謂いであり、登場人物が一人である演目を指すのではないとも指摘する。
- (5) 引用は、北原保雄・小林憲次編『続狂言記の研究』(一九八五年・勉誠社)に拠った。
- (6) (5)に同じ。
- (7) 東京藝術大学附属図書館蔵本。請求番号W7668・431-M1158。半紙本八巻八冊。刊記「于時文政三庚辰年孟春五代目都太夫一中ノ正本板元 江都瀬戸物町 文花堂 塩屋庄三郎」。
- (8) 引用は(7)同本に拠った。論者が適宜句点を補った。
- (9) (8)に同じ。
- (10) (8)に同じ。
- (11) (8)に同じ。
- (12) 棚橋正博『日本書誌学大系48(1) 黄表紙總覽 前篇』(一九八六年・青裳堂書店)による。
- (13) 植木智広「喜三二の黄表紙と夢の趣向」(『國學院雑誌』第一一三巻八号、二〇一二年八月)等参考。
- (14) 東京都立中央図書館加賀文庫蔵本。請求番号9131WS。読みやすさの便を図り、句読点と鉤括弧を適宜補った。清濁は原本のまま表記した。
- (15) (12)に同じ。

- (16) 『金々先生栄華夢』でも深川の芸者に金兵衛が袖にされる場面でも唐言が用いられており、特に目新しい情報ではない。
- (17) (12)に同じ。
- (18) 引用は、今中宏編『大江戸文庫』2（一九五七年・江戸芸術社）に拠った。ただし、一部表記を改めた箇所がある。
- (19) 佐藤至子『江戸の出版規制 弾圧に翻弄された戯作者たち』（二〇一七年・吉川弘文館）等参照。
- (20) 伊原青々園「並木五瓶研究」（『日本文学講座』第十卷「江戸時代下篇」一九三二年・新潮社）に拠れば、奈河七三之助が角の芝居から撤退したため、五瓶がより多忙になったと指摘される。
- (21) (20) 同論文に天明四年に上演された演目に「けいせい倭莊子」(正月)、「稲光田毎月」(八月)、「思巷街容性」(八月)、「弓勢金平嬢」(十一月)、「けいせい忍術池」(十二月)が挙がるが、『洛陽見物左衛門』は見えない。
- (22) 請求番号31-1-1。半紙本六卷合五冊。ただし、「今少し狂言もござり升れど」、「今日は是切」などと言う「口上」で締めくくられる。中途までの台本のようなものである。
- (23) 四代目市川團藏が演じた。天明四年八月五瓶の脚本「思巷街容性」では幡随院長兵衛役を演じている。
- (24) 引用は、京都大学附属図書館大惣文庫蔵本（請求番号31-1-1）に拠る。なお、適宜句読点を補った。
- (25) 小池正執筆担当「東海道中膝栗毛」（『新版近世文学研究事典』二〇〇六年・おうふう）。
- (26) 富士昭雄「『東海道名所記』／『東海道分間絵図』解題」（『叢書江戸文庫』50 二〇〇二年・国書刊行会、所収）。

〔追記〕資料の閲覧と転載を許可してくださった東京都立中央図書館および大阪府立中之島図書館に感謝申し上げます。また、引用文中に一部、今日においては人権上好ましくない表現が含まれていますが、原作を尊重して転載したことをお断りします。